

Robert Frost の “The Death of the Hired Man” における “water” の重要性

キーワード: water

平山千鶴子

I

Robert Frost (1874-1963) の “The Death of the Hired Man” は、1914 年に第2集 *North of Boston* に所収された。この詩が書かれたのは、1905 年、Frost が 31 歳の時である。祖父が買ってくれたデリーの農場を 26 歳から営み始め、6年目にあたる頃である。この時期、Frost は、詩人の道をとるか否かの葛藤を抱いていた時期、あるいは、自身の生き方を深く追求していた時期にあったといえるかもしれない。

そのような Frost の想いを表すかのような人物 Silas が、“The Death of the Hired Man” の対話詩の展開に重要な人物となっている。彼がかつての雇い主の Warren と Mary 夫婦の家へ「牧草地に溝を掘るために “he’d come to ditch the meadow” (l. 48) 帰ってきたことから、夫婦間の対話が展開していく。Silas がかつての雇い主の元に戻ってまでして「溝を掘る」ことを望んだのは、詩の最後での彼の死を考えれば、彼自身が生前に成し遂げておくべきと考えていたと容易に推測できる。つまり、彼の求める生き方を象徴していると思われる。Silas には「ハシバミの枝で水源を探し当てることができる “He could find water with a hazel prong” (l. 86) 能力があった。彼にとってのみならず、この詩にとって、“water” は重要な象徴となっており、それは Silas (の生き方) を表す象徴として意図的に用いられていると思われる。本稿では、“The Death of the Hired Man” における「水」の象徴を考察することにより、「水」というものが物質的にも精神上においても、対話を織りなす夫婦の関係性や、対話詩そのものにとっていかに重要であるか検証していきたい。

II

この詩は対話詩として、Silas の回帰をめぐって、夫婦が互いの価値観をぶつけ合わせるメイン・プロットと、その対話の中で語られるサブ・プロットとしての Silas の “water” を求める生き方が明らかにされていく。Mordecai Marcus は、この夫婦の関係について次のように述べている。

The readily accessible and popular “The Death of Hired Man” also treats conflicts between individuality and social value, as manifested in the exchanges between Warren and Mary and acted out by their disloyal former hired man, Silas. [...] Silas’s plight is greater than theirs, his attempts to preserve self-respect having divided him between loyalty to longtime employers and self-delusion about his own value and deserts.¹

つまり、夫婦間の価値観の対立は、Silasを通して明らかになるのである。乾草作りで忙しい時期に出発してしまった忠誠心に欠ける Silas を受け入れられない Warren と、それでも Silas を受け入れてやろうと寛容な姿勢を示す Mary の意見は当初真っ向から対立する。そして Silas の苦境は、夫婦のものより大きく、Silas という人間を通して織りなされる対話詩は、そのすべてにおいて彼が重要な役割を担っていることが分かる。

まず、詩の冒頭で、Mary が帰宅した Warren に Silas の帰りを告げるところからプロットは始まる。ここでは、本稿の主題である “water” とは相対立するイメージである「火」が象徴的に用いられている。以下、まずは「火」のシンボルについて考えてみたい。

Mary sat musing on the lamp-flame at the table
Waiting for Warren. When she heard his step,
She ran on tip-toe down the darkened passage
To meet him in the doorway with the news
And put him on his guard. ‘Silas is back.’²

Mary は Warren の帰りを待ちながら、おそらく Silas の受け入れを反対するであろうことを承知の上、彼に Silas が戻って来たことを知らせることになるのを予期し、思案にくれてポーっと “the lamp-flame” を見つめる。この「ランプの炎」は、この後始まることになる Warren との論争の火種として象徴的効果的に用いられている。Mary の夫に対するしぐさからも想像に難くない。また Silas が求める「水」とは逆のシンボルとしての火は、Silas の身に起こることになる死をも暗示させる不吉な象徴であるとも考えられる。ここで、フロストが「火」を象徴的に用いた詩 “Fire and Ice” (1920) における彼の「火」に対する意識を見てみたい。

Some say the world will end in fire,
Some say in ice.
From what I’ve tasted of desire
I hold with those who favor fire.
But if it had to perish twice,
I think I know enough of hate
To say that for destruction ice

Is also great
And would suffice.³

ここで、「あるものは火で世界が終わるのであると言う」とあるように、火は「終わり」を象徴する。しかし、このナレーターは、火を氷と対比させながら、氷で世界が終るのならば、「私は火に焼かれる方に賛成である」と言う。つまり、このナレーターにとって、世界を「終わり」にさせるものとしての「火」には、肯定的意味合いをもっているといえることができる。この詩における「火」の象徴を鑑みれば、フロストの「火」に対する思いは、Mary の見つめるランプの火に込められているといえることができるかもしれない。つまり、ここでの「火」は、Silas の死による詩の終結を暗示してはいるが、それは否定的ではなく、むしろ肯定的想いを含蓄していると考えられる。

次の場面でも「火」は効果的に用いられている。

He's worn out. He's asleep beside the stove.
When I came up from Rowe's I found him here,
Huddled against the barn-door fast asleep,
A miserable sight, and frightening, too— [. . .] (l. 33-36)

Silas は夫婦が会話をする今、まるでストーヴに抱かれるようにして眠っている。ここでの「火」が示すのは、身体を温め、生命を長引かせるための「火」でありながら、彼の死を暗示しもある。“A miserable sight, and frightening” と強い表現で Mary を通して描写される Silas は「すっかり変わり果てた」姿で戻ってきた。Silas がこのような状態になってまで戻って来たのには、物乞い的な経済的援助を求めたというような短絡的な意味合い以上に、何か重要な理由があると仄めかされるのである。

そして、Silas が戻って来た理由を Mary が Warren に伝える。「彼は牧草地に溝を掘るために戻って来たのよ」“He said he'd come to ditch the meadow” (l. 48)。死を悟って戻って来たのかもしれない彼にとって、「溝を掘る」ということは、今やらねばならないという急場の事態であったことはいうまでもない。彼が拘る「水」の象徴とは何であろうか。ここでガストン・バシュラールの水の持つ浄化の象徴が示唆に富む。バシュラールは「水は純粋性のための自然な象徴として現われ、浄化の冗長な心理学に明確な意味を与えることになる」⁴として論じている。溝から連想される流れる水は、死を前に枯渇した自分の心に再び水を流したいという Silas の思いを表すと同時に、雇い主への不義理を贖い、この家族との絆を取り戻したいという思いをも表すともいえる。Silas と水の繋がりはいさらに強調されていく。

Harold's associated in his mind with Latin.
He asked me what I thought of Harold's saying
He studied Latin like the violin

Because he liked it—that an argument!
 He said he couldn't make the boy believe
 He could find water with a hazel prong—
 Which showed how much good school had ever done him.
 He wanted to go over that. But most of all
 He thinks if he could have another chance
 To teach him how to build a load of hay— (l. 81-90)

ここで、4年前の乾草作りにアルバイトとして雇われた青年 Harold のことが語られる。Harold は Silas とは対照的な考えの持ち主であった。そんな生意気な Harold に対し、Silas の自尊心もまた強調される。Harold は、Silas が長年の経験から培った知恵を信じようとしなない。「ハシバミの枝で水源を探し当てることができる」⁵ Silas が感性を重んじる人であるのに対して、Harold は知性重視の人で、現在は教師をしている。Silas は「Harold といえはすぐ心の中でラテン語を連想し」、「学校がろくなことを教えちゃいない証拠だ」と Harold の知性重視を非難して、彼を「本の虫」とまで言うのけるのである。二人は7月中ずっと焼け付く太陽の下でやり合って、互いの価値観をぶつけ合わせたのであった。感覚を重んじる老人 Silas と知性派の若者 Harold の考え方がすべて合わなかったのは当然の事であったのだ。

ところが、この日家に戻って来た Silas は、Harold をもう一度農場へ呼び戻してほしいと Mary に頼む。「乾草の積み荷のやり方を彼 [Harold] に教える機会」がほしい、二人でもう一度力を合わせて農場を整備したいというのである。それは、人生の中での不和を解消し、自分の持つ知識を若い世代へ伝えていきたいという Silas の想いを如実に示す。Harold に対しては、和解すること以上に、自分の持つ知識を伝授したいという気持ちもあったのであろう。

このように生きてきた Silas の人生には、後にも先にも特に自慢できるようなものがなかった。Mary は Warren に次のように Silas の人生について語る。

And nothing to look backward to with pride
 And nothing to forward to with hope,
 So now and never any difference. (l. 103-105)

Silas の人生は、「誇り」をもって振り返ることのできる過去も、「希望」を持てる未来もない。“And nothing” が過去・未来を表すのに同じ形で二度使われており、この文法的単純さ(繰り返し)が、Silas の人生が平坦であり、取り立てて語るべきものがないつまらないものであったことを強調する。そして、“So now and never any difference” として、Silas の全人生を否定するような強い表現で言い切られる。Frost が 1914 年にイギリスで書き、雑誌 *The Atlantic Monthly* の 1915 年8月号に発表され、翌年、第3詩集 *Mountain Interval* の巻頭詩として所収された “The Road Not Taken” にも同じような表現がある。ここでこの詩における “difference” の用いられ方を “The Death of the

Hired Man”のそれと比較してみたい。

I shall be telling this with a sigh
Somewhere ages and ages hence:
Two roads diverged in a wood, and I—
I took the one less traveled by,
And that has made all the difference.⁶

この詩における“*And that has made all the difference*”と、“*The Death of the Hired Man*”の先に言及した箇所“*So now and never any difference*”は、同じ“*difference*”という言葉を使い、それぞれ人生を表しながらも、その意味は対象的な表現となっている。“*The Road Not Taken*”の場合、人生を振り返ると、大変な道を選んだことが、結果として他の人とは「異なる」、価値ある人生となったと示す、自己尊重的意味合いで“*difference*”が使われている。一方、“*The Death of the Hired Man*”の Silas の場合、「特徴を表すものが何にもない」と“*difference*”、が無の象徴として機能している。それは彼が特筆すべきことがないということであり、他の人との“*difference*”を示すような証がないという絶望感を示す。Mary を通して語られるこの言葉は、客観的に見て Silas の人生は取り立てて話すべきものは何もない人生であったということの意味する。

そんな状態の中、Silas が求めたのは、過去における不和の解消、そして、最後に求める「家」だった。「家」とは何であるかを、Silas の受け入れをめぐって、Warren が次のように言っている。

Home is the place where, when you have to go there,
They have to take you in. (l. 122-123)

「人が戻らなくてはならない時には、家族が迎え入れてやらなければならないところ」と言う Warren に、Silas を受け入れようとする気持ちが芽生えていることを示す。そして夫に続いて「家」の定義について Mary が続けて次のようにつけ加える。

I should have called it
Something you somehow haven't to deserve. (l. 124-125)

二人にとって「家」とは戻る資格がない人間でも迎え入れてやらねばならない場所。それは、ヨハネの福音書で言われているようなキリスト教の父なる神への精神、そして、神の人類を受け入れる態勢を表しているとも考えられなくはない(ヨハネ 14:2-3)。だから Mary は Warren に、Silas のこれまでの不実から彼を判断するのではなく、彼の存在を認め、受け入れるよう促すのである。

Silas が求める家の自然には、象徴的な「水」がある。

Its light poured softly in her lap. She saw
 And spread her apron to it. She put out her hand
 Among the harp-like morning-glory strings,
 Taut with the dew from garden bed to eaves,
 As if she played unheard the tenderness
 That wrought on him beside her in the night. (l. 108-111)

「豎琴のような朝顔のツタ」にかかる「露の滴 (“dew”）」は、この家が自然の「水」を付与されていることを表している。このような家の月の光は Mary の膝を照らし、彼女のエプロンは光を受ける。そして露の滴に手を差し伸べて、「音なき旋律を奏でる」。この情景は、天と地と、そして Mary とが一体となっていることを感じさせ、露の滴を含めたその繋がり、水の循環を暗示させる。dew のイメージ⁷である水の清らかさに月の光があたり、生命の復活をも連想させる。それはわずかな水ではあるが、月光の効果で輝きが表現され、循環や生命、そして温かさといった、どんな人も受け入れてくれる家を想像させる。その家は、元雇い主の Warren と Mary の家なのである。

Frost が往年 73 歳の時出版した *Steeple Bush* に収められた “Directive” には、ここで注目すべき家の表現がある。

Then for the house that is no more a house,
 [...]
 A brook that was the water of the house,
 Cold as a spring as yet so near its source [...] ⁸

このナレーターは、かつては人の営みがあり、水が流れ、人を孤独から救った家が廃墟と化しているのを目の当たりにして、過去の生命溢れる家の素晴らしさを嘆く。家に対するフロストの概念の基盤がここにあるのではないか。そして「小川はかつてその家の水であった」とされるように、この家には流れる水があった。人生の終わりへの旅にでた旅人であるナレーターがこの家を見て涙した後、つまり幼い頃の無垢な自分に立ち返った時、本当に希求するものが示される。それがこのナレーターにとって、水が循環していた家なのである。Silas が求めた水が循環する家そして牧草地は、この “Directive” へと発展していったのであろうと思われる。Frost は家と水とを関連させ、人間の心を潤すものとして、詩作において発展させていったのではないか。先の「露の滴」の描写はまさに、家にもそこに住まう家族の関係や心にもある種の潤いが潜在的にあるはずであることを意味していると言える。

Silas は、死の間際にあつて、自分自身の人生、そして生命の枯渇状態を知っていたからこそ、それを潤す水を求めたとも言える。それを見つけられる場所こそが、Warren と Mary の家であったのである。二人への不義理による不和を解消したいという思いや、人のためになることを人生で何かしたいという表向きの思いから、この家に戻って来たことは言うまでもないだろう。そして Silas に

とって、農場を営むこの夫婦の生き方こそが自分にふさわしい、戻るべき生き方だったのである。「銀行の重役」であり「金持ち」の弟の家があったにもかかわらず、Silas はそこには帰らなかった。なぜなら、Silas の生き方は、社会的身分のある弟のそれとは相容れないからだ。「牧草地に溝を掘る」ため、何もかも失った Silas は、“Directive” の旅人同様、求める究極ものとしての家に帰ってくるのである。そして、水の循環する、自然と共存する家で Warren と Mary との家族愛も築きたかったのであろう。

ここまでの対話で、Warren の Silas に対する決定的心境の変化が理解できる。最初は “I’ll Not have the fellow back” と息巻いていた Warren は、ここで “I know, that’s Silas’ one accomplishment” (l.91) と Silas の乾草積みでの失敗の絶対でない特技を認める。そしてついには、“I can’t think Si ever hurt anyone”(l.153) と、Silas をニックネーム “Si” と親しげに呼ぶ。John Kemp も、次のように、Warren の Silas に対する態度の変容について論じている。

Warren exemplifies the stern, pragmatic, down – to – ears confidence that comes from living in accordance with local customs and standard. He speak with assurance, and his concern is with matters of economy, productivity, and usefulness.

[…]

Warren seems finally to accept her point of view, the poem makes clear that his conversation like her

Sympathy, is a departure from local norms.⁹

Warren の Silas への感情は、詩の冒頭と最後とでは明らかに異なっている。彼は、かつて雇っていた Silas の長所を思い出し、それを認め、Silas について肯定的な言葉で表現するようにならなっていくのである。ここで、Silas の受入れに関して相対して異なっていた夫婦間の価値観の闘争は鎮まると同時に、この家族と Silas との不和も着実に解消していくのである。

その結果、Warren は Marry に促され、Silas を案じて彼の様子を見に行く行動を起こす。

Warren returned – too soon, it seemed to her,
Slipped to her side, caught up her hand and waited.

“Warren,” she questioned

“Dead,” was all he answered. (l. 172-175)

Silas は Warren との和解を直接することはなく息を引き取っていた。Warren は、Silas の死を Mary の手を掴んで知らせる。ここで、二人がつなぐ手は、夫婦間の絆を、そしてそれは Silas を含めた家族の絆を思わせる。この点について、Robert Pack は次のように論じている。

[T]hey sit next to each other at the same level [...]. This equality of position suggests their respect for each other and the complementarity of their pint of view.¹⁰

ここで二人が同じレベルで座ることにより、二人の価値観の闘争が解消された暗示となる。それは Silas の死があつたことだったのである。二人にとって Silas の死は、再びかつての絆が取り戻されたことをも意味するのだ。

Silas の死が確認される前、“moon” を含めた自然描写は、先の “dew” についての場面と同様、象徴的意味を持っているようである。月は、水とのつながりで重要な象徴関係が元来ある。アト・ド・フリースによれば、月は、「無意識、包むとか心および自然界や現象の神秘的な側面を表し、激しい能動的な側面を表す太陽と対照をなす。水と関係が深い」¹¹ という。このような意味を踏まえ、まずは「露の滴」の場面における月を見てみたい。

Part of a moon was filling down the west,
 Dragging the whole sky with it to the hills.
 Its light poured softly in her lap. (l. 106-108)

この場面では、「露の滴」と月の光が Mary のエプロンを媒介として繋がり、家を包み込むような月と Mary に連想される優しさのイメージ、そして「露の滴」と月に関連するイメージから、水の循環を思わせる。では最後の場面での月はどうであろうか。

“[...] I’ll sit and see if that small sailing cloud
 Will hit or miss the moon.”

It hit the moon.
 Then there were three there, making a dim row,
 The moon, the little silver cloud, and she. (l. 166-171)

ここでも、月を見るのが Mary であり、彼女の視点から月が見られていると考えれば、月の包容力や優しさが想起される。そして、月 / Mary にぶつかるのは、“small sailing cloud” であり、雲は水上を航海する船のごとく水のイメージに結びつけられる。そして決定的な「月、小さな銀色の雲、そして彼女」という表現によって、三者は連鎖し、繋がり、水の循環が感じられる。それら三者は “a dim row” を作り、確実に結びついているのである。

Marcus は、この場面について次のように説明している。

Mary’s last speech and the description of the cloud striking the moon provide gentle

foreboding, and the couple's final handclasp, initiated by Warren, implies a bond of love including Silas.¹²

おそらく、この月の繋がり描写は、夫婦が Silas を受け入れようとする啓示的瞬間を、そして、Silas を含めた家族の絆を示唆しているのではないだろうか。

III

この詩のタイトルにあるように、「死」が前景化されてはいるが、ここでの死は必ずしも否定的な意味合いにならない。Silas は死にあつて、望んでいたものを取り戻すことができたといえるのではないだろうか。価値観の異なる夫婦は、Silas を通して気持ちを同じにした。そうした役割を果たす Silas が、「牧草地に溝を掘る」という理由で家に戻って来て求めたものとは、“water”、そして水のごとき潤いのある人間関係であろう。それは水が循環するかのごとく、時間も循環する、過去への回帰でもある。Silas が見つけ出そうとした水源とは、夫婦にとっては、二人を結びつけた Silas その人であるといえるのかもしれない。Silas は死の直前にあつて、自己の枯渇した状態を知っていたから、水を求めたともいえる。水が潜在するこの家には、実際的な意味の水(地下の水源)のみならず、生命的循環の、人間的愛の象徴としての水も確実にあったのである。“water”の象徴はこの詩にとって重要なものなのではないだろうか。

注

1. Mordecai Marcus. *The Poems of Robert Frost: An Explication* (Boston: G. K. Hall & Co. 1991) p. 43.
2. Robert Frost. “The Death of the Hired Man,” in *Collected Poems, Prose, and Plays* Eds. Richard Poirier and Mark Richardson (New York: Library America, 1995) l.1-5. 本稿における “The Death of the Hired Man” からの引用はすべてこのテキストにより、以下引用の末尾に () で詩の行数を記す。
3. Robert Frost. “Fire and Ice,” in *Collected Poems, Prose, and Plays*. Eds. Richard Poirier and Mark Richardson (New York: Library America, 1995) l. 1-9.
4. ガストン・バシュラール『水と夢—物質の想像力についての試論』小浜敏郎、桜木泰行訳(国文社、1980)p. 195.
5. ハシバミが水源を見つけるのに用いられることについて、*Encyclopedia of Superstitions, Folklores and the Occult Science of the World*. (Detroit: Gale Research Company, 1971) には、“The least portion of a rod of the attracting kind held under the person's arm-pit, or closely applied to his side, totally prevents the attraction to all the subject of the rod, and causes them to repel it, excepting *springs of water*, its attraction to which is only to be prevented by spitting upon the hands or moistening them with water, which acts according to the Sixth Observation, but something spirituous or ethereal, joined to and inseparable from it, that does the business” (p.

1665、イタリックによる強調は筆者)とされている。また、Gertrude Jobes. *Dictionary of Mythology Folklore and Symbols* (New York: The Scarecrow Press, 1962) には、“Twigs of hazel were used to make one’s self invisible and as divining rods to discover hidden treasures” (734) と解説されており、ハシバミは何か重要なものを探し当てるための道具(シンボル)である。

6. Robert Frost. “The Road Not Taken,” in *Collected Poems, Prose, and Plays*. Eds. Richard Poirier and Mark Richardson (New York: Library America, 1995) l.16-20
7. アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎訳(大修館書店, 1984)p.173
8. Robert Frost. “Directive,” in *Collected Poems, Prose, and Plays*. Eds. Richard Poirier and Mark Richardson (New York: Library America, 1995) l.145, 150, 151.
9. John C. Kemp. *Robert Frost and New England: The Poet as Regionalist*. (Princeton: Princeton UP, 1979) p. 110.
10. Robert Pack. *Belief and Uncertainty in the Poetry of Robert Frost*. (Hanover: UP of New England, 2003) p.104.
11. アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎訳(大修館書店, 1984)p.437
12. Mordecai Marcus, 44.